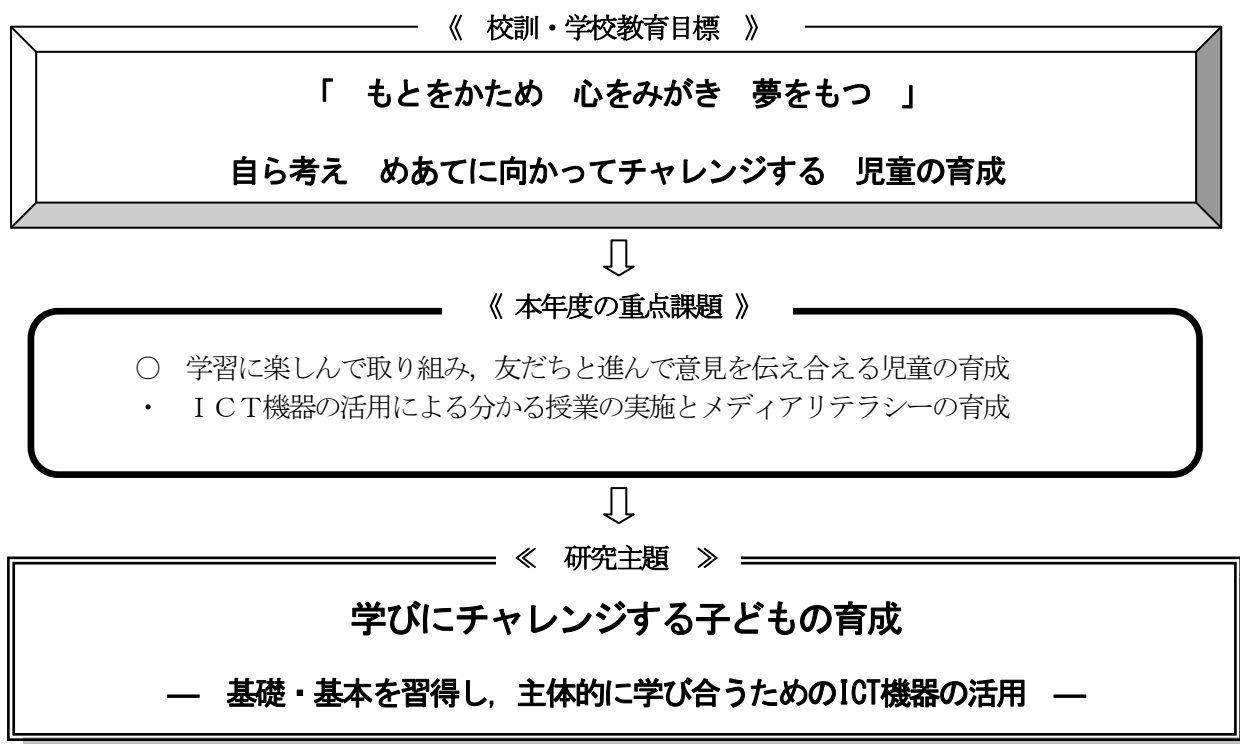


Ⅱ 校内研修計画

1 研究主題



2 研究主題設定の理由

(1) 今日的な教育課題から

今日、子どもたちを取り巻く社会は、少子化・核家族化に伴う家庭・地域の教育力やコミュニティーの低下、高度情報化の伸展による人間関係の希薄化などにより大きく変化している。学校教育においても学力低下、他者と関わり合う力やコミュニケーション能力の不足など、多くの課題が指摘されている。さらに、知識基盤社会の到来や、グローバル化の進展など急速な変化の中、子どもたちには、幅広い知識と柔軟な思考力に基づいて判断することや、人として自立し、他との協働を図ることのできる主体的で能動的な力を育てていくことが求められている。

このような多様で変化の激しい現代社会の中で、生きて役立つ「思考力・判断力・表現力」を育成するためには、「話す・聞く・書く・読む」といった言語活動を基盤として、基礎的な知識・技能を習得すること、生涯を通じて他者と関わり合うことで学び続けようとする主体的な態度を育成することが必要だと考える。

(2) 児童の実態から

本校の児童は、指示されたことや与えられた課題にまじめに取り組める児童が多い。そして、昨年度も話型指導やペア・グループ学習などを意図的に授業に取り入れたことで、自分の考えを相手に伝えようとする態度が個々に育ちつつある。しかし、それらの自分の考えを分かりやすく伝えるための技能や相手の意見を共感的に聞こうとする態度などは十分とは言えず、日常生活の中でも自分から働きかけたり、思いを伝えたりすることができにくい。また、基礎的・基本的な知識の未定着や集中力の欠如から学習意欲を欠いてしまう児童がいるのも実態である。相手の話や考えをしっかりと聞き、自分の考えと比較したり、そこからつないで発言したりしながら、よりよい方法や答えを求めて表現しようとする態度が、日常生活の中でも感じられるように指導を行っていくことが望まれる。

加えて、平成24年度の県学力状況調査における全体の教科の傾向としては、4教科とも県の平均を上回るという結果であった。算数より、国語の方が県平均よりもポイントが高い傾向にあり、一昨年度からの課題であった無答率については、無気力による無答は減ったと捉えることができた。それぞれの教科における観点別の正答率や「基礎的・基本的な知識技能」「思考・判断・表現」における正答率も、学校全体として県平均を上回っており、昨年度からの取組の成果が見られた。しかし、それぞれの教科において学年差が見られ、国語における「話す・聞く」の観点で正答率が高ければ、その他の観点についても正答率の割合が高い傾向にあった。

これらを踏まえて、昨年度は考える場の設定や表現する機会の保証が十分とは言えない部分があり、今年度、更なる場や機会の確保をする必要があると考えた。

(3) 前年度の成果と課題から

前年度は、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」と「主体的に学び合うための授業づくり」に重点的に取り組み、さまざまな取り組みや教科で「思考力・判断力・表現力」の育成を図った。同時に、QUアンケートによる児童理解や、家庭学習を習慣づけるための家庭との連携などに取り組み、継続している。それらの取組を通して、以下のような成果が挙げられる。

- ① 「学びの3訓」に基づいた授業規律の確立に取り組み、学習用具における共通理解が教師、児童ともに深まった。
- ② 授業内ドリルの定着や学年毎の土台づくりとしてのドリルタイムの内容を見直し実施したことを通して、基礎的・基本的な内容が身に付きつつある。
- ③ 目的を明確にした話し合い活動と、板書と連動した㊦㊧㊨㊩を使ったノート指導を行ったことで、各々が自分の考えを持ち、話し合いによる学び合いの意識付けや考えの交流を図ることができた。
- ④ 授業の中でICT機器を利用したり、職員のメディアリテラシーに関する研修を行ったりすることで、児童の学習意欲を高め、分かる授業の工夫の仕方を模索することができた。

しかしながら、取り組みの継続や改善が考えられる課題点も以下のようにある。

- ① 学習規律の定着具合や基礎的・基本的な知識や技能の習得やそれを活用する力には個人差が大きい。
- ② 「思考力・判断力・表現力」を身に付けさせるための、話し合い・聞き合うといった他者との交流による学び合いについて、定義や観点を共通理解して取り組むこと。

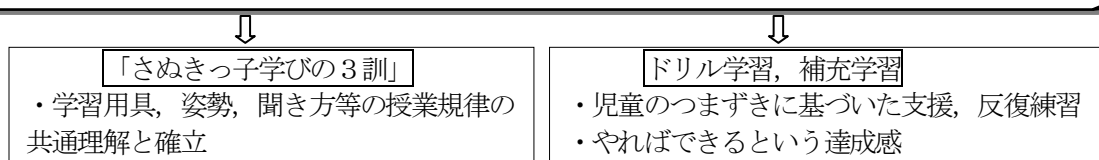
これらの課題を克服するため、本校では、「思考力・判断力・表現力」を「自分なりの考えをもとに判断し、考えを進んで相手に伝える力」と捉え、児童に生きる力として身に付けさせたいと考えた。

そこで本年度は、「学びにチャレンジする子どもの育成」を研究主題に設定し、児童の学習意欲や知識・理解、学び合いを促す手立てとしてICT機器を活用しながら、基礎・基本の確かな習得と児童一人一人が主体的に学び合うことのできる授業づくりを目指した研究を進めていく。

3 研究仮説及び内容等

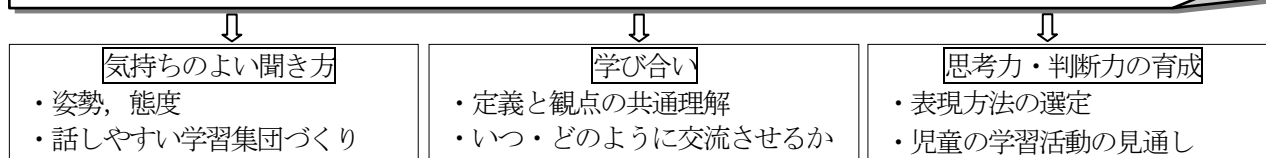
<仮説1>

- 授業規律をより確実に定着させるとともに、つまずきに基づいた学習を行うことで、基礎的・基本的な内容及び技能を習得し、分かる喜びを感じながら意欲的に学習に取り組むことができるであろう。



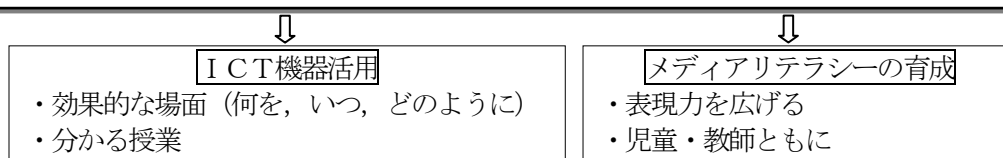
<仮説2>

- 相手の話を共感的に聞こうとする態度の育成を図る中で、目的を明確にした話し合いの場や方法、形態を意図的・計画的に取り入れることで、他者と協働しながら思考を深めていくことができるであろう。



<仮説3>

- ICT機器を効果的に活用することで、児童の学習意欲を高めたり、理解を促したりすると同時に、表現力の多様性を習得させることができるであろう。



4 研究構想図

自ら考え めあてに向かってチャレンジする 児童の育成



学びにチャレンジする子どもの育成

— 基礎・基本を習得し、主体的に学び合うためのICT機器の活用 —

思考力・判断力・表現力

基礎的・基本的な知識・技能の習得

- 授業規律の確立
 - ・さぬきっ子学びの3訓
- ドリル学習の充実
 - ・週3回のドリルタイム
 - ・授業内ドリルの確保
- 基礎・基本の定着を図るテストの実施
 - ・ミニテスト
 - ・パワフルテスト
- 補充的な学習の充実
 - ・つまずきに立ち返った指導
 - ・放課後の補習時間の確保
- 家庭学習の習慣化
 - ・「家庭学習の手引き」の利用
 - ・自主学习ノートの継続

主体的に学び合うための授業づくり

- 学び合いを支える環境づくり
 - ・互いを認め合う聞き手の育成
 - ・学び合いを生かす単元構想
 - ・習得・活用を場を意識した授業
 - ・効果的な交流のさせ方
 - ・学習形態の工夫
- ICT機器を活用した授業改善
 - ・個々の実態に合った教材・教具
 - ・メディアリテラシーの育成
- 書く活動の充実
 - ・ノート指導
 - ・板書計画
- 少人数指導
 - ・きめ細やかな対応
 - ・活躍の場の確保

言語活動の充実

- 話す・聞く・書く力の育成
- 読書活動の推進

学びを支える集団作り

- 自尊感情を高め、所属意識が持てる支持的風土づくり
- 児童理解に基づく道徳教育、人権・同和教育の推進
- 家庭・地域と連携した、望ましい生活リズムの習慣化